

書名：算数の天才なのに計算が
できない男の子のはなし

文：バーバラ・エシヤム

絵：マイク&カール・ゴードン

訳：品川裕香

出版社：岩崎書店

出版年月：2013年7月

総ページ数：32ページ

ISBN：9784265850365



推薦者

坂井武司

鳴門教育大学大学院准教授

自然系コース（数学）

みなさんは「算数障害」という言葉を聞いたことはありますか。算数障害は学習障害の1つと捉えられています。文部科学省の定義によると、学習障害とは、「基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を示すもの」です。特に、算数障害に関係するのは、計算する能力と推論する能力です。「算数障害には大きく分けて2つのタイプがあると言われていています。「①数の処理や四則演算が苦手で筆算や暗算にはつまづくけれど、数の概念が理解でき、数学的推論や数学的思考ができるタイプと、その反対に②数の処理や四則演算ができてても数の概念が理解できず、数学的推論につまづくタイプです」(p.31)。このような児童生徒は2%程度いると言われていています。将来、学生や院生のみなさんが担任するクラスや担当する学年に1～2人いる可能性があります。

この絵本には、マックスという小学校3年生の男の子が出てきます。マックスは九九が苦手で、タイムトライアルの九九のテストではいつもビリになってしまいます。そのために、「計算できない、マックス、マックス、バカマックス」(p.15)とからかわれ、何だかうまくいかない自信を失ってしまいます。しかし、マックスはとんでもない才能を持っていました。代数が好きで、小学校3年生でありながら代数の問題を解くことができるのです。マックスは、どうやら①のタイプの算数障害だったようです。担任のトペル先生はマックスの才能に気付きませんでした。しかし、シングルトン先生は、たまたま拾ったマックスのノートを見てそのことに気づき、マックスを数学オリンピックチームのメンバーに選出してくれたのです。お話はここまでですが、その後、マックスは自信を取り戻し、自分の得意な分野で活躍したことでしょう。

私は、「算数障害」について院生と共に研究を進める中で、この絵本に出会いました。しかし、この絵本には「算数障害」という特殊なケースだけに限らず、子どもを教育する者として忘れてはならない大切なことがメッセージとして込められているように思えます。子どもはそれぞれに得意なことや不得意なことがあります。多くの可能性を持っています。だからこそ、子どもを教育する者は多面的に子どもを捉え、子どもの個性を最大限に伸ばすために努力をする必要があります。学生や院生のみなさんには、シングルトン先生のように、子どもの優れた力を見逃さない観察力とその優れた力を発揮できるように支援する指導力を有した教員になって欲しいと思い、この絵本を推薦します。

